

すぎなみ大人塾 総合コース

GENERATION LAB —コノ時代ヲ解読セヨ—

第3回調べ方「アカデミック」篇

平成29年6月21日(水)午後7時から9時

ゲスト講師:坂口緑 明治学院大学社会学部教授

於:セッション杉並 視聴覚室

コース学習支援者 (株)アソボット 伊藤 剛代表取締役

補助者 NPO法人場とつながりラボhome's

丹羽 妙ファシリテーター

学習支援者 伊藤剛

皆さんこんばんは、ジェネレーションラボ 学習支援者の伊藤です。

前回皆さんに書いて頂いたアンケートの方は、大好評だったということでした。先週は、高瀬毅さんという、ジャーナリストの方に来て頂いて、ジャーナリストからみる真実とは何か、もしくは真実と事実とはどう違うか、ニュースの読み解き方等を、お話しをしていただきました。今日の趣旨は、また改めてご紹介しますけれども、坂口緑先生に来ていただいて、いわゆる学者の世界の中にもある物事のとらえ方みたいなことをお話していただきたいと思っています。

学問というのが、何なのかというのが僕自身はもちろん分からない、正確な定義は出来ませんが、とにかく世の中にあることをなお且つ、そこにある法則とか、その真実みたいなことをあらゆる角度からいろんな世代間の人達に炙り出していく活動かなと思っています。ただ、テレビをみていて、例えば、ノーベル賞の時期に、今年は何とかの部門でノーベル賞を取れましたとかいっているのを聞きますけれど、結局その研究が何をしているのかよくわからなければ、おそらくそのニュースを聞いていて、分かった気になっているだけかもしれません。ワイドショーみたいに、学問とは全然違った角度で、人格的な側面を説明していく事であったり等、やはり本当の論点は学問の世界の事が分からないと、なかなか分からないのだろうと常々思っています。一方、僕の業界からすると、ジャーナリストとアカデミアの方には、共通点があります。次のスライドをご覧ください。これは、通常メディアだと思ってください。これは、CNNとかTIMESという海外のメディアではありますが、通常僕らがイメージするメディアです。インターネットやCMというのも、メディアですし、twitterとかFacebookは、我々が自分達で動かすことが出来るメディアです。何を説明したいかということ、通常僕らメディアで見ている情報は、

決して一次情報ではないのです。専門用語でいうとプライマリーインフォメーションと呼びます。

結局メディアというのは、基本的には最初に情報を持っている人から、情報を提供してもらったものを記事にして掲載して載せるということが、メディアの役割です。では、最初の情報を持っている人は誰かということ、例えば、高瀬さんみたいなフリーランスのジャーナリストが、アメリカの国立図書館まで行って色々調べたことであったり、もちろん現場で取材をしたことであったり、今日の坂口先生みたいに学者の方々が研究をしたり、実験をしたり、もしくはそのままりサーチしたりしたものです。こんな実験結果が出ましたよとか記者会見をしたりします。そういった情報を僕らの業界でいうと、プレスリリースというような言い方をします。そのプレスリリース情報をメディア側に情報が届いて、基本メディアの人がニュース記事としてメディアに載せて、それを我々が普段ユーザーとして見るという情報の流れになっていくことが殆どです。特に日本では新聞記者は雇用されている社会なのです。アメリカのメディアというのは、会社に所属している記者より、フリーランスの記者の人が多かったり、例えば6割くらいはプレスリリースで紙面が出来ていたりするので、最初に情報を作っている人の情報をとにかくちゃんと取り上げて、流通させるという流れになっています。何を言いたいかということ、この第一次情報を作っている人たちが、どういうふうに情報を見極めていくか、もしくは、今回のテーマである真実や事実なりにたどり着こうとしているのか知ることというのが、すごく大切だなと思っています。

この大人塾の講座として、ジャーナリスト篇とアカデミック篇という形で設定しています。この先の話でいうと、次回はネット検索の話がありますが、ネット検索は、有象無象になっている情報を、僕らがアクセスする時にどういうふうに検索をしないと何が出てこないのかということを知っていきます。今日は、改めて調べ方を調べるアカデミック篇という事で、先生の方に色々とおっしゃっていただきたいと思います。それでは改めてご紹介させていただきます。明治学院大学の先生で、坂口緑教授です。

ゲスト講師 坂口緑

こんにちは、坂口と申します。実は生涯学習を研究している者です。大人塾というのは、この世界では本当に有名なところで、講師としてきたのは、初めてですけど大変光栄です。ふたつ返事で参りました。30年前、高校3年生だったのですが、初めてデンマークへ留学しました。その時2つびっくりしたことが

あって、1つは、同じ高校生が食堂のおばさんとか校長先生とか、ちょっとなんかイベントで場所があるとか言って、対等に話をしているという事にとても驚きました。

高校生だから指導されるという感じではなく、放課後の活動とかがあったからなのか、ちゃんと食堂のおばちゃんにも案を聞いたり、校長先生に許可を取ったり、という事を同じ高校生がやっているのを見て、へえこういうところもあるんだというふうに驚きました。

コペンハーゲンってどんなイメージでしょうか？とてもいいところです。9月くらいから雨が降り、風が吹き、10月くらいに、もうほとんど晴れた日が1日もなく、11月にはもうそれが混ざって、本当にひどい天気のところなのです。2つ目に驚いたことというのは、天気が悪い日でも、平日の夜18時半に町の集会所に行くと、おじいさんおばあさんが楽しそうに集まって、誰かの話を聞いて勉強していたことでした。私が住んでいたアパートの1階に住んでいたおばあさんに話しかけられました。「日本から来たの？江戸時代の文化は素晴らしいわね」その方はいろんな講座に全部出て今は江戸時代を学んでいるとおっしゃっていました。デンマークという国は、対等に話をする文化があるところなんだなと18歳の時知りました。おじいさんおばあさんが天気の悪い日に、わざわざ用事を作って勉強する社会があるというのも、その時に知りました。それ以来、生涯学習とか市民社会論とか、社会教育というのが、すごく気になり、そして今にいたるという感じです。

さて、ここでクイズです。電車の中とかでよく見るものかもしれません。塾の広告です。このグラフ、おかしいと思いませんか？おかしいとしたら、どこがおかしいと思いませんか。よく見ていただくと、右肩上がりじゃないのです。754、697と減って 764と減っての846、そこにわざとらしく矢印がついていて、この塾に来るとすごく合格しますよという雰囲気を出している棒グラフなのです。社会学では、こういうグラフが怪しいということを勉強します。広告のグラフってというのは、こういうふうに加工作されている事をちょっと見ていただこうかなと思いました。広告と学問は、やっぱり違うということですね。この塾の広告は、3Dと矢印って言うのが大好きで、常にこの右肩上がりを演出し続けています。それでは、2問目、どちらが適切でしょうか？グラフが2つあります。核家族世帯の占める割合なのですけど、どっちがいいグラフだと思いますか？ちょっと考えてみてください。

左側がいいという方は、どれくらいいらっしゃいますか？右側がいいグラフじゃないかという方は、どれくらいいらっしゃいますか？これをよく見ていただくと全世帯数の占める核家族の占める割合というのを見せるためには、実は、55、57、59、61、63、65 のという目盛りの方に変化が見える、この下のメモに対して、正解は、左側です。もう1つだけ、折れ線グラフです。平成になって少年凶悪犯罪が激増というときに出てくるグラフです。平成元年から10年、少年凶悪犯罪というのが1500件くらいから2500件くらいに増えて見せているのですが、このグラフ実は、犯罪白書などをちゃんと見ると戦後の少年凶悪犯罪の全体数、昭和20年からカウントするともう激減しているというグラフの1部なのです。平成になって少年の凶悪犯罪全体が減っているのが事実です。でも、こんなふうに切り取ると凄く増えているグラフになります。こんな事を社会学では、まず学びます。今日、皆さんと一緒に考えたいなあと思っているのが、プライマリーインフォメーションについてです。

私達が普段、どれだけ論理的に考える事が出来るか、論理的であるかどうかという事について、皆さんと一緒に考えたいと思います。論理的に考えるというのは、学問分野によって、その論理というのが違うのかどうか。学問の起源というのが、どこに求められていたか。その時にロジカルであることというのは、どんなふうと考えられてきたのか。もう少しいうと論理的でないといえるのはどんな場合なのかについてです。

また質問です。科学研究費をご存知ですか？日本には、文部科学省が出している科学研究費（以下、科研費）という項目があります。これが日本のいろんな科学技術の基礎研究の基本的な予算になっていて、これを全国の研究者の人達が公募結果を気にしながら、自分たちの新しい研究を進めるというそのための予算となっています。この項目分類・種類をみると大体、世の中の学問と言われるものの分野の数がわかるのかなと思って持ってきました。昨年度の科研費のハンドブックのコピーです。見ていただくと細目表、(平成28年度公募：321細目)というのをご覧になれますでしょうか。学問分野は321あります。多いですか、少ないですか？もしかしたらなじみのある分野が見つけれられるかもしれませんが、例えば、系というのが大枠で4つに分かれている。総合系、人文社会系、理工系、生物系、これも日本の学問の分け方の1つです。よく文系、理系なんて言い方をしますが、科研費的には4つですね。例えば、看護学というのはどこに入ると思われますか？直感で、総合系か、人文社会系か、理工系か、生物系か、看護学はどこに入ると思われますか？

私も、総合系かなと思いました。ずっと探したら、最後のところに、看護学として、基礎看護学、臨床看護学、生涯発達看護学、高齢看護学、地域看護学に分かれていたりします。生物系なのです。これは、文部科学省が全国の研究者に予算を配分する時の分け方です。山中伸弥教授は、2012年にノーベル生理学・医学賞をジョン・ガードンという方と共同受賞しました。iPS細胞の臨床もだいぶ進んでいますけども、その研究をもって知られる方です。科研費データベースというのがあって、そこに入ると、何の分野で取っているとか、幾ら取っているとか全部わかるのです。山中先生は何ページにもわたって、多分トータルで多額の研究費を取っているトップ科学者です。この方がどの分野で取っているかという、実は、色々でした。それが面白いなと思って、まず2つだけ挙げますが、まず「細胞核初期化の分子基盤」という研究をなさっていて、ここの研究分野は、医科学一般というものでした。さっきの系でいうと生物学、医学とか全部入っていたんですね。「BRG1によるクロマチン構造変化を介した細胞初期化促進メカニズムの解明」というのを取ってらっしゃって、これは2億円ですね。細胞生物学という研究費で取ってらっしゃいます。ちょっとiPS細胞に近づいてきましたね。細胞生物学というのは、生物学の中に入っている細目名の1つです。この方は、ご存知でしょうか。中室牧子先生といいます。この方は、「学力の経済学」という本を出して30万部のベストセラー。竹中平蔵さんの愛弟子で、ニューヨーク市のコロンビア大学で学位を取って戻ってきて、慶應義塾大学で先生をやっているらしいです。中室牧子先生は教育の初期投資というのがやっぱり全体の教育レベルを上げるのだという事を主張している方ですが、「小規模保育が子供の発達や健康に与える効果」何の分野で取っていると思いますか？小規模保育だから、保育かなと思ったのですが、この方は徹底して、財政公共経済という分野で取っていて、全体の分科としては、経済学です。経済学者ですね。もう1つ、「貧困と災害の教育経済学 社会的不利や困難に打ち勝つ子供をどう育てるか」この研究もまた実は、経済学の中の、財政公共経済という所で、認められているものです。科研費は、結構取るのが大変で、私達も3回に1回くらいしか通らないといわれています。私は、「デンマークにおける生涯学習実践の構造に関する質的研究」というので取りました。額はたいしたことないんですが、分野は、教育学です。でも、私のやっている研究は、教育学なのかというと、実はそうではなくて市民社会学論、生涯学習論といったものなので、更にここからもう1つ下のカテゴリーに当てはまるものだったりします。

その意味で、大学の先生たちが、あるいは日本の研究者と言われる人たちが実際取り組んでいる学問の分野、実は、321細目に全然当たらないよという、たく

さんあるということが何となくイメージできたかなと思います。では、最初からそんなに学問が細分化されていたのでしょうか。

一気に2400年くらい遡りますが、紀元前、大学の起源アカデメイアと言われるプラトンが作った学問所とされています。当時のそのアカデメイアは何をしていたかという、討論をし、お風呂に入り、お風呂をあがった所で、ずっと横に寝そべって、寝そべりながらご飯を食べ、フルーツを食べるとというのが、市民階級に許された贅沢だったのです。その人達は何をしていたかと言ったら、延々と空想的な話、ずっとこの世にとって一番良いとはどういうことか？というのを話し合ったりします。宇宙というのがあるらしいが、その果てはどこにあるのか？善さとは何か？そんな事をずっと話をしていました。そして、町々の、一番弁が立つという美少年達を連れてきては、ギリシャのアテネ郊外にあるアカデメイアにプールを造って集め、そこに学園が開かれたのが最初といわれています。その後、ソクラテスの一番弟子プラトンが、習ったことを全部記述して「国家論」「ソクラテスの弁明」といった本になっていったわけです。もう1つ、その50年後ですけど2350年くらい前ですが、アリストテレスという人が、今度は、アテネの反対側、アカデメイアのある反対側、リュケイオンという地方に学園を開いています。アリストテレスは、ソクラテスみたいな、問答述だけではなく、ちゃんと系統だてて学問を教えたといっています。4つ科目があったそうです。読み書き、当時のギリシャ語、古代のギリシャ語です。体育、音楽、やりたい人は図画をやったといわれています。アリストテレスの政治学という本に、そこに学問とはというのが、全部体系的に記されています。読み書き、体育、音楽、図画です。特に音楽が重要といったのが、アリストテレスの一番の売りでした。不思議ですけど、その政治学という、後々はギリシャの町を代表した政治家になっていく人達のために、市民階級の少年達を育てるというのが学園の目的だったんですけど、良き指導者になるには、音楽をやりなさいと言いました。

音楽は何故いいのかというと、音階があるからだというそうです。感情的なフリギア音階ではなく、ドリス音階がいい、何故ならそれが極端ではなく中庸を知るから、と。アリストテレスは、なんでも真ん中がいいと言った人なのです。中庸がいいのだから、ドリス音階がいい、ドリス音階を身に付けるためには、学園で音楽をやりなさいと言いました。当時の音楽とは何だと思いませんか、星座を見る、その星を音階に直して、こういう三味線のようなものが楽器だったらいいんですけど、それで再表現するというのが、音楽だったそうです。アリストテレス研究をやっている人が当時の音楽を再現すると言って、自分で作ってくれたんですけど、それは意外に軍艦マーチみたいな曲だったんですね。

どこが中庸なのかも全然わかんないと言って返しましたが、それが素晴らしいとされてきました。このような音楽を身に付けた人が、国の統治者、リーダーとして、素晴らしくなるというふうに考えたのが、アリストテレスです。こんなふうに学問の起源というのは、音楽だったといってもいいくらいです。その後、学問の分派、分かれ目が出来てきたのは、もう少し時代がずいぶん経ってからです。今から700年前くらいでしょうか、中世になると、自由七科と言われてたりするんですが、学問分野に分かれるようになります。1100年か1200年時代に、昔のプラトンが書き残したアカデメイアやリュケイオンの学問が、何だったのかというのを皆で探り出すブームがあったそうです。これをネオプラトリズムと言ったりするのですが、昔一体何をやっていたのかというのを当時から比べても1000年以上前ですよ。でも、学問を皆で確かめ合うという時代がありました。そのような1000年前の事を考える。そのグループを自分たちで、アカデミーと呼んでいたらしいです。自分達で俺たちは音楽のアカデミー、俺たちは幾何学のアカデミー、俺たちは天文学のアカデミーなんていうふうにして、アカデミーというのは、昔の高度な事を現代に生かすために研究するグループの名前であったそうです。その時に出来たグループ、文法について調べるグループ、修辞学、これは弁証論と書いてありますが、対話して相手を打ち負かすみたいなものです。論理学ですね。文法、修辞学、論理学、算術学、天文学、幾何学、音楽学です。一番重要だったのが、この上の3つで、文法、修辞学、論理学これこそが、大学だと言われたそうです。アカデミーの中のアカデミーと言われたそうです。それ以来、アカデミーというと、学術団体という意味だったり、大学という意味だったり、高度な学問をやる場所という意味で、定着したと言われていています。

一番古い大学というのが、古代ギリシアを除けば、ボローニャ大学と言われていています。どこの国かわかりますか？イタリアです。ボローネーゼ、ミートソースの発祥の地らしいです。同じころパリ大学というのが出来ています。ソルボンヌ大学の起源に当たるものです。それから、オックスフォード大学というのもできていて、ケンブリッジなんかより昔に出来ています。そしてライデン大学、オランダ。シーボルトの資料が全部あるところですけど、そして、一番近代の大学、今の大学に繋がるのを造ったのが19世紀です。今のボローニャ大学は石造りの立派な大学ですね。法律学が大変有名ですけども、当時、ボローニャ大学というのは、なんでイタリアのそんな所にとるかと思いますが、東西の交易をするキャラバン隊の人達が行きかう町だったそうです。そこで、遠い町までアラブのところまで胡椒を運びにいったひと達が、アラブの様子を書いてきて伝える。その人の話を聞きたい人達が集まってくる、そんなふうにして、

大学の原型が出来たと言われています。学生たちが、遠くに行った人たちの話を聞きたい、何か極めた人たちの話を聞きたいと言って、勝手に集まって先生たちを招聘しています。そのまま大人塾と言っても過言ではない感じに始まったのが、大学の起源です。大学の特徴としては、自治特権というのがあって、新制ローマ帝国の時代、皇帝だったり、教皇であったりの権力が圧倒的なんですけど、その中であって、自由に学問はしていいという事が特権的に認められていたそうです。学問というのは神の存在を証明し続けるために、みんな形而上学しかやってないですが、天文学をやっているとあそこに神がいるとは思わないよという事も学問の世界の中では話していいという、そういう事も許されていたそうです。なので、この時の自治特権は、政治、宗教どちらからも自由である。その中で論理的に考えられること論理的に語られることだけが崇高であるという考え方が育っていったと言われています。こうやって改めて話すと大学って素晴らしい所ですね。

そこからさきほどみた科研費に見られる学問分野の細目費に近づいていきます。きっかけは、デカルトです。「我思う、故に我あり。」大学の中でしか宗教や政治は否定できませんでした。デカルトは、大学の枠を超えて、これを本にしました。本にするばかりか、あちこちへ行って講演して回ります。そればかりか、俺はこれを発見したから、金くださいと言ってお金持ちの所を回って、自分は科学を研究すると言って回ります。

本当はデカルトの前後に人体実験をするという人がいて、人間の体を解剖して、血流みたいなのを全部再現する為に、死体を幾つか用意して、血をちょっとずつ止めながら、どうやって回っていくかみたいなことを観察するというをやっていました。デカルトは、そういう事をする為に研究費を集めて回るリーダーでした。デカルトは、神の存在は否定しないで、人間の理性（真・偽を判断する能力）で考えたことは、人間の世界から宇宙に至るまで、人間の内部に至るまで客観的に分かるかもしれない（普遍的な認識の到達する）という事を初めて公に言い出した人です。『方法序説』という本に書いてある。

「我思う、故に我あり」、我って人間です。

※神羅万象を全部、疑ってみる。疑いきれないものを真理とする。

※認識：見たり、聞いたり、感じたりすること

人間なんて、当時たかだか50年くらいで死んじゃうわけですけど、理性だけは、もしかしたら今知っていることが、次の世代をもっと知る事になり、またその次の世代は、その知をもっと発展させるかもしれないということをデカルトは

言いました。それ以前は全否定です。だって神様の中に生かされているから、神の手の中で私達はどんどん死んでいく、なんか使い古されていく、なんか木がのびて枯れていくみたいなイメージだったのが、人間の知性の部分だけは残るって考えたんです。それ以降、啓蒙主義という考え方が生まれました。人間が理性に照らして考えれば、その理性に照らされたものってというのは正しいっていう発想です。それがいかに聖書と矛盾していようと、それがいかに教皇のお説教と矛盾していようと、実際の政治的な力からほんとは言っちゃまずい啓蒙主義という事だとしても。こうやって、凄く叩かれたりしたんですが、デカルトをかくまったところは、さっき出たライデン大学というところなんです。当時の16世紀17世紀オランダっていうのは現代のシンガポールみたいに国際的な都市で、最先端の研究がおこなわれていました。後に出来たのがベルリン大学。これ以降大学というのが今の形に近づいていきます。今の形というのは、レクチャーをするのとゼミナールの組み合わせで授業が進む形です。フンボルトという人は、我々のルーツを知るには、外国語を学ぶ必要があると言ったのです。当時推奨されたのが、古代ギリシャ語、ラテン語です。今でも大学では、第一外国語、第二外国語などをやらせています。自分の事を知るには他の国の言語を知ってその全然違う所の文化を知りなさい。そうやって自分の位置を相対化しなさいという事です。

参加者

中世ヨーロッパでは学問的な振興はなかったのでしょうか？中世が終わって500年経つまでデカルトが出るまで、やっぱり500年は何にもなかったですか？

ゲスト講師 坂口縁

学問的には、修道所で学問がなされていました。司祭になるための教育が特別になされていたのですが、候補者が村から集められて、その人達の中で、聖書解釈という形で沢山の学問が生み出されていきます。中世哲学になっていますね。ほとんどが聖書の解釈だったり、それから古典ですよ、ギリシャ神話だ当たりの解釈っていうのを特別に大学という場ではないところで、勉強されていました。天文学だったら天文学の発展の仕方、医学だったら医学の発展の仕方があるので、必ずしもデカルトまで、何にもなかったってわけではないです。ではここから現代の話にうつります。結局論理的に考えるっていう事で研究者の人達が何を気にしていて、何をダメと言っているのかをみたいと思います。アラン・ソーカルという物理学の教授は、ソーカル事件を起こしました。あんまりそのワイドショーとかで報道されるような類の事件ではないのですけれど

も、学問の世界では、社会を震撼させるような事件でした。ソーカル氏が『ソーシャル・テキスト』という雑誌に投稿したところ、内容がメチャクチャにもかかわらず、採用されて、その論文が載ったというのがソーカル事件と言われるものです。ジャック・デリダとかジル・ドゥルーズ人文系の学問の中で流行しました。単に英文学とか仏文学をそのまま読むのではなく、テキストをバラバラにして再構築すると、全然違った意味が見えてきます。全体としては見えないのだけれども、いったんバラバラにして再構築するという。その時に、物理学とか、数学とか、天文学の数式も適当に引用されているのですが、その引用のされ方があまりにひどいという事で、このソーカルという方が、人文学の人達が引用する物理学っていうのをまねて自分も論文を書いてみたのです。結局アメリカの人文系の研究者の人が、自分の論文と言って発表している媒体が、こういうパロディ論文をパーンと載せちゃうということは、どれだけ誰も論文を読んでいないかという事を証明してしまったのです。研究論文が投稿されている論文集というのは、学者にとってそこが一番の発表の場です。そこが本当に機能していない。誰も審査してないし、読んでもいないし、意味も分かっていないし、意味も本物か偽物かが分かってない人たちが、論文の採否を決めている。これは研究者業界に大きなショックをもたらしました。

元理化学研究所の研究者による STAP 細胞事件。覚えていますか？これもやっぱり、一流誌を舞台にした科学者の大きな事件でした。2013 年『Nature』っていう、自然科学者にとっては、最高の投稿論文を出す雑誌ですね。STAP 細胞の作製法の論文、多機能性検証論文、2 個あったみたいですね。こんな若い研究者が載せたのは、連名があったにせよ、凄い快挙だったのです。ノーベル賞級の発見と言われたり、理系女子の星のように扱われましたが、後に、研究不正が明らかとなって、論文は撤回されて、『Nature』も掲載を取り消しました。それはそうですよね。実際のところ私は全然全体像とか分からないですが、証拠として出す STAP 細胞の作り方についての論文の中で、構造を示す写真の画像を切り貼りしていた。よく見えるように切り貼りするという事は、こういう業界ではあるそうです。明らかに違うもの、なんか不自然な直線っていう、それを全部検証しているブログの人の画像を借りてきたものですが、不自然な直線というのがあって、これはあってはならないものなのだそうです。撮れた画像、顕微鏡で見て撮れた画像というのがないと、STAP 細胞がないという事になります。出来たと言っているのは、あのチームだけで、もう 1 回同じ方法で作ろうとしても、なかなかできなかったというニュースまで流れて来たかと思えます。この方法を見つけたというのは、同じことをやれば同じように再現できるというのが、科学にとっては真理だし科学にとっての論理です。STAP 細胞

事件が示してしまったのは、もしかしたら出来たのかもしれないし、もしかしたらこの人たちは凄かったのかもしれないけれども、それを見せる『Nature』の論文で不正をはたらいてしまったので、結果として本当に再現可能かどうか分からないという状態の論文を出してしまったという事です。これが不正と言われるものですね。人文科学系の人達の論文、新しい解釈と言って論文を出したけれども、その内容が結果でたらめだった。データの不正というのを認めてしまった、データの不正というのを織り込んでしまったがために、再現不可能な事実というのを科学の論文として出してしまった。

論理的に考えるとは、おそらく2つの型があって、両方両立させるのは難しいかもしれないですけど、どっちかをするというのが学者の仕事のはずです。1つは、仮説論証型と書きましたが、新しい解釈を示すという事です。一般的に通用している常識を覆す。これは歴史の研究をする人もそうでしょうし、私もどちらかという上の方（仮説論証型）ですね。生涯学習で、色んな実践例を見ながら、今、一般的にこうだと思われているけれど本当はこういうことがあると言う、新たな解釈を提示するというタイプで論理的に考える型があると思います。もう1つは仮説を再現することによって、新しい方法で普遍的に応用可能な方法を見つけるという事です。

これはある意味、神の領域に近づきますね。不変というのはそうですよね。10年前も10年後も通用する、10年前は通用しないかもしれないけど、10年後も100年後も通用する一般的な知という意味では、普遍的に応用可能な方法を見つけたりすること、これが論理的に考えることです。321の分野にわたって研究者が張り付いているので、日本はそれなりに基礎的な研究に携わる人口を抱えることの出来る余裕を持っている国だと思います。新しい知を本当に見つけてノーベル賞をとったりする人がまだまだ出てきますし、新しい知を解釈して一般的に通用する常識を疑うようなそういう本も次々出版されています。本屋に行くときびっくりしますよね。その知的なベースにある力と言ったらこの国って本当にすごいなって思います。おそらくこういうことをやって、プライマリーインフォメーションを作り出しているからかなというふうに思います。

学習支援者 伊藤

ありがとうございます。科学というと、教科書に書いてある通りに実験したらやはり水蒸気が出ましたみたいに仮説再現型がわかりやすいと思っています。おもしろいと思ったのは、坂口先生が属しているような部門、人文社会学系だと、そもそも人間を対象にしています。例えば社会学だと、まずは、取材を、

インタビューをとりなします。例えば戦争体験者の人達に取材をする、もしくは、ドメスティックバイオレンスの人達に取材をすると、取材対象の方の人間性が分かるみたいなことは、理系の方の科学者にすると、理系分野での再現研究はできないですよ。多岐に亘る人文社会分野の人間の営み、研究等があり、これだけの文科省の科学研究費項目の細目になるというプロセスがあったと考えます。新しい解釈というのは、先ほど紹介してくださった中室先生も、幼いころの学力の差がいかに関の経済の損失につながるかという、小さいころの学力と国の経済という誰も結びつけていなかったところを結び付けたという解釈です。でもこれは、再現性はないですよ。これから50年後もそうかもわからないけど、今までの過去を振り返って、ある時期を切り取って、因果関係をみると分かりましたという。なんかこの、今、最後ご説明していただきましたけど、この再現が出来るかどうかということだけが科学だというと、裏を返せば、疑い続けることですよ。世の中の常識だと言われていることを。まあそういう事をやり続ける事が、逆に言うと真実にどんどん近づいていく、もっと言えば自分の先生も疑っていくみたいなことをやっていくわけですね。

今の時点で、この時点でご質問があれば、是非していただきたいなと思います。

参加者

学問とはこういうものだという事を定義されたいという事で、お話しをいただいたんでしょか？

ゲスト講師 坂口縁

学問と言われる分野で、どういう考え方が通用しているのかという話を説明したつもりでした。学問の世界の中で論理的である、論理的に考えることについて、現代ではおそらく、2つくらいの型があって、そこに集約するような考え方が流通しているのじゃないかという事ですを話そうと思いました。普通に本ではないかもを読んでいるとジャーナリスティックである事と、アカデミックである事を区別するのは簡単しれません。他方で、研究者の人達がどういう事に気を付けて物事を今進めているのか、ということに関してもお伝えできればなあとあって、2つのパターンを出しました。

参加者

科研費というのは、文部省からの予算ですか？

ゲスト講師 坂口縁

そうです。他の省庁も研究費を持っていて、それをまた委託したり、出していたりしますし、企業や財団からも研究費をもらうことは可能です。

参加者

研究1つ1つに出すものなんですか。

ゲスト講師 坂口縁

数千億円あって、そこに向けてみんなが公募して審査して、受かった人がもらえるという仕組みです。経費ですので、実際に何につかうのかを書かなくてはならず、厳しいです。論文を発表して、成果を報告して、また申請しますが、受かるかどうかはわかりません。

学習支援者 伊藤

我々一般の人が聞いても分からない研究タイトルに見えるわけですけど、どうやって審査をするのでしょうか。

ゲスト講師 坂口縁

それはピアレビュー制度というのをとっています。ピアレビュー制度というのは、過去にこういう研究費をとった人が審査員としてエントリーして自分の研究分野に近いものが出てきた時に、本当に同じだと研究者仲間だったりするので、ちょっとずらしてなんですけれども、その人達を複数審査員として指名してその人達が書類を見て判断しています。

学習支援者 伊藤

出てきた企画書を他の研究者に見られながらやるわけですね。落ちたにもかかわらず、自分のアイデアが他の研究者に見られる機会にもなるってことですね。

ゲスト講師 坂口縁

この辺は、倫理協定で、こっそりマネしないという事に勿論なっていますし、審査する側は複数なので、1人の人だけの評価に偏らないようにしている。割り切っている業界でもあります。

年配の方が、レビュアーだっていうのは業界では大体分かっているんで、この分野でしたら、あの人が入っている。あの人が入らなければこの人が入るといいうのは分かっている、どちらかと言えば次の世代に次の世代に引き継がれていく審査集団ですね。

参加者

アカデミック的なところでの、データの見方とか、調べ方の所でいろいろ分けてあるんですけど、新しい論理やトータルな視点は芽生えてきているのか。

ゲスト講師 坂口縁

素晴らしい質問ですね。私の先生が公共哲学というのをやっている先生だったんです。哲学ではなくって、哲学は人文学の本当の一部の一部になってしまっている、そうではなくって現代の事象と哲学的な事象っていうのを同時に考えるような分野が必要だと1990年代から主張されてきました。タコツボ化した専門分野をトータルに見る視点を持つことは、現代の研究者が目指していく方向の一つだろうなと思います。そして私たちはさらにそこを乗り越えていかないといけないわけで、公共哲学というのが本当に役に立つのかと疑いながら、学生時代を過ごしました。結局は、その先生が言っているタコツボ化の方に私は、戻ってしまったのかなというふうに思いました。確かに全体を見るという事に関する関心が、全体、なんか現代になって非常に低下しているっていうのはご指摘の通りだなと思います。

学習支援者 伊藤

基本的に学者の方は、自分の専門領域はここですという考えを持っていらっしゃるんで、逆にそれを超えて話すのは越権行為だっていう謙虚な方が多いのです。今回はアカデミック代表っていう事でなかなか答えられない質問もたくさんある前提で皆さん聞いて頂きたいんです。

ここ100年だけ見ても、100年前にはなかったような発想とか、研究分野のテーマ、テクノロジーが進化したことによってできるようになってくる。分類が増えていくというのがあると思うんですけど、こういうのは、日本だけの事じゃなくて、世界アカデミック分類認定協会みたいなものがあるのでしょうか、どうやってこの品目ができるのでしょうか。ジャーナリストってどうやってなれる

のですかって質問したところ、ジャーナリストって名刺に書けばいいのですよ。つまりそれくらいフリーなのですよ。学者さんの場合そうはいかないじゃないですか、その学問が認められるためには、指導教授がいて、その論文も認められてみたいなこと、そのプロセスが、体系が信頼されているわけですよ。そういう中で新しいものを生み出す瞬間というのは、どうやって可能になっていくのですか？

ゲスト講師 坂口縁

人文系の場合だけですが、人文系の場合は、スター研究者が新しい領域を造っています。スター研究者がこうだっていうと、それに続くフォロワーが生まれてきています。例えば、大人の教育学、アンドラゴジーというのがあるのですが、20世紀の初めに出てきたもので、もともと心理学、もともと哲学、人間学と言われるものだったんです。そこからペゲラーというドイツ人がアンドラゴジーという本を書きました。最初は注目されていませんでしたが、アメリカで翻訳されたら、それ以降、大人の教育学というのが出来ました。ペゲラーはある意味、スターになり損ねたのですが、それをリバイバルした人というのが何人かいて、その人達がつくったわけです。そんなのも1つですね。

学習支援者 伊藤

今ならばLGBTが流行っています。昔からあったかもしれないですけど、そこに名前が出来て、新しいジェンダー論みたいなものも出来て、それを研究する人が出てきています。最初に見つけて世の中に認知させる力を持って行った先生たちに付随して、そこが1つのジャンルになっていくという事でしょうか。※LGBT:女性同性愛者(Lesbian)、男性同性愛者(Gay)、両性愛者(Bisexual)、トランスジェンダー(Transgender)の各語の頭文字をとったもの。

ゲスト講師 坂口縁

そうですね。まさに1次情報を見つけた人というのは、必ずしも研究者であるとは限りません。

参加者

国から研究費の予算が付くというお話をされていたのですが、それ以外の民間から、こういう文系の予算、研究費の予算っていうのは、ついてきているような状況なのですか？学問の独立性と国が予算を出すという矛盾があるように

思えるのですが。

ゲスト講師 坂口縁

素晴らしい質問です。人文系の予算って言うのが科研費の中でも、どんどん削られています。それだけではなくて、コストが削られていて、人文系の先生方が引退した後そのコストを埋めないで、もっと必要とされる違う分野の情報であったり、ips 細胞であったりっていう所に人件費を移されて、コストが後任をとらないという方法で凍結されているところが多いです。そういう意味で、人文系の研究者周りの状況は冷え切っています。折角、博士課程に進んで、博士論文を書いて、物凄く才能にあふれる人たちがいるのですが、コストがない為に、残念ながら、研究をずっと続けるという事ができなかつたりする。民間の研究費も多少ありますのに、そちらの方がむしろ紐が付いている場合が多く、すぐに役立つとか、10年後に役立つとか、何かに役立つとか、女性の活躍が、なんてことが色々付帯に、条件にされていて、そういうものがあつたりする。そういう意味では、科研費の方が実はフリーです。で、ピアレビューなので、国のお金ではありますけれど、研究者集団が選んでいるという意味では、先ほど、自治特権っていうほど強いわけではないのですが、学問の論理に従っている状況です。ただ、大学院も700くらいという事で、非常に増えすぎていたりと言われていて、その中でも特に人文系の風当たりは非常に強いです。科研費というのは、私立の大学の中の予算で、研究費を実はもらっているんですね、国公立に関しては、こういうのがなく、研究が出来ない場合というのが本当にあつて、本1冊買えないそうですよ。資料が手に入らない、どこにも行けないとなったら、本当に何もできない、手足縛られて、頭で何かしろと言われても本当に無理なので、その論点は非常に厳しい時代に入りつつあります。

学習支援者 伊藤

多分、ご質問していただいた背景に、それこそ今の国が文系学部なんかなくして、理系学部だけにすればいいというような発言も背景にありつつ、現場の状況がという事ですね。最後ワークの所に行きたいと思います。

ゲスト講師 坂口縁

別紙をご覧ください。次の3つの文を適切な順番に並べ変えましょうという問題を作りました。ちょっと読みましょうか。

- ①しかし、19世紀から20世紀初頭にかけては両者の間にそれほど明瞭な区別はありませんでした。
- ②ドイツのヴィルヘルム・ヴント、フランスのエミール・デュルケム、オーストリアのジークムント・フロイト、アメリカ合衆国のジョージ・ハーバート・ミードなどは、社会学にとっても心理学にとっても重要な思想家として位置づけられてきました。
- ③現在、社会学と心理学という2つの学問領域が成立しています。

ゲスト講師 坂口縁

3つの意味が通るように並び替えてみてください。最初の文章がどれかなと分かったら、あとは分かるかなと思います。正解は③から始まります。次に来るのが、①です。③①②というのが、一応この文章の入れ替えになります。では問2です。次に7つの文を適切に並び替え、問1で作った段落の内容の「根拠・理由」を説明する別の段落を作り、かつ、なぜその順序になるのかを説明してください。ちょっと大変ですよ。お隣なんかとお話ししたりしながら、進めていただければ。

- ①こう考えられていたからです。
- ②だから社会の構造や機能を考慮しなければ心理現象は理解できない。
- ③社会科学が未発達だったゆえに細分化が進んでいなかったからではありません。
- ④したがって人間心理の理解抜きに社会の仕組みを把握できるはずがない。
- ⑤同時に、社会性を離れて人間はありえない。
- ⑥それは何故でしょうか。
- ⑦社会を構成するのは人間です。

ゲスト講師 坂口縁

有難うございます。これ一応⑥から始まると思ってください。

・・・解答製作中・・・

学習支援者 伊藤

有難うございます。折角なので、シェアしたいという所ありますか。

参加者

⑥③⑦⑤④②①です。

学習支援者 伊藤

私もそう。ちなみに、今の順番で、私もそうでしたという人他にもいらっしゃいますか。3人ですね。

参加者

私は、⑥③⑦④⑤②①

学習支援者 伊藤

今のは、⑥③⑦④⑤②①の順番と一緒にいたという人はいますか？3人という事ですね。じゃあ、ちなみにもう1人くらい聞きましょう。

参加者

⑥③⑦②④⑤①

学習支援者 伊藤

結構違うという事ですね。

ゲスト講師 坂口縁

正解は、⑥③⑦④⑤②①です。これで読んでみましようか。

それは何故でしょうか。社会科学が未発達だったゆえに細分化が進んでいなかったからではありません。社会を構成するのは人間です。したがって人間心理の理解抜きに社会の仕組みを把握できるはずがない。同時に、社会性を離れて人間はありえない。だから社会の構造や機能を考慮しなければ心理現象は理解できない。こう考えられていたからです。

ゲスト講師 坂口縁

私もね、最初は間違えました。大学1年生の春学期にやる授業の練習問題を持

ってきました。何を目的としているかという、パラグラフの中のキーセンテンスを見つけるというのが、このワークの主旨です。何が1番言われている事なのか。⑦番、社会を構成するのは人間です。というのが、もう3つめくらいに出てくるわけです。これ以降、人間、人間、人間というふうにつき、⑦番、社会を構成するのは人間です。④番、したがって人間心理の理解抜きには社会の仕組みを理解は把握できません。と続き、人間と真理というのが、これ重ね合わさります。そうすると、⑤番、社会性を離れて人間はありえない。その次、だから心理現象は理解できないというふうに、人間がとれて心理という言葉で独立していく。そういう流れになっているのです。

学習支援者 伊藤

これを見つけられるかどうかという事なのですね。唯一の正解者の方は、どう考えたのですか？

参加者

③は、何々ではないと言っているから、前置きみたいな感じなのかと。したがってとだからが、②と④であったので、何となく、2つ筋があるのかなと思って、社会から人間、だから何々というのが、⑦④同時にというのが、段落が変わっているような感じになって、それを説明する⑤②。②で終わった時になんかおさまりが悪いなと思ったので、ちょっとめてくれそうな①を最後に持ってきたという感じです。

学習支援者 伊藤

①を結論の文にしようというふうにした。皆さん、これから、最終的に自分が作った文章と今の文章を並べてみると、また違いが分かるってことですね。僕がやったミスは技法に行っちゃいました。だからとかしたがってとか、この辺の接続詞的な物を抜き出して、からって書いてある物を抜き出して、その論旨を追っていくというよりは、文章的に、接続的につながりそうな文章のくっつけ方を探しちゃった。やっぱり内容の整合性をとるという事まで行けていない。なんかクイズみたいに考えちゃって大失敗です。

ゲスト講師 坂口縁

そこまで説明が出来たらもう満点なんですけど。

学習支援者 伊藤

さっきの論旨、人間、人間とってそこから心理みたいなことは、まったく読み込めてなかったですね。だから、途中で塾生の方々を見ていて、僕も、思いましたけど、文章自体がまともじゃないんじゃないかという気持ちに、すり替わたくになりますね。最後ちょっと家に帰ってやるワークになるように、少しお配りしているものを、解説を含めて説明していただいて、終了に向けていこうと思います。よろしいでしょうか。

ゲスト講師 坂口縁

実は、論理的に考えるという時に、研究者の人達が必ずやらないといけない事で、注をつけるというのがあるので、注の解説というの、ワークで用意してきました。今回時間がないので、ちょっとだけ説明します。大学では、刷り込むように教えています。論文で、自分の意見を客観的に述べるためには、根拠となる証拠を示す必要がある。大げさなんですけど、何より大事なものは、他人の考えや文章を利用する場合、それは、自分の考える文章ではないという事を明記する事。「ちなみに、プロの物書きや研究者がこの点を怠ると、盗作や盗用の汚名にまみれ、作家生命、あるいは研究者生命を絶たれる」って学生にも言います。

学習支援者 伊藤

所謂、盗用と引用の違いという事ですね。

ゲスト講師 坂口縁

ABCとある資料があるかもしれません。もし時間があったら、どれが新書か、論文か、一般書かというのを当ててもらおうと思って持ってきたものです。パッと見ではわからないので、これを解説しますが、注の数を実はよく見てみると、論文というのはずわかります。この横書きのC、これは論文です。ワークライフバランスについての論文ですが、注が沢山あります。これだけで論文です。論文って数字を言うだけで注が必要になります。新書、AとBどっちが新書だと思いますか？パッと見てもわかんないですかね？答えを言いますもう時間がないので、Aが新書です。これもワークライフバランスについての「仕事と家族」という中公新書の一部です。B、Bは一般書です。翻訳したものなんですけど、これが一般書です。普通に読むというものなので、注もあるんですが、非常に大雑把な注しかついていないです。あの、論文って、なぜその主張するのか、どこから持ってきたのかというのを、延々と言い訳する、そういうものです。な

ので、新書って一見論文のように見えるのですが、実際に社会学者が書いているページを持って来たのですが、それでも、新書になったとたんに、注というのがあっさりなくなる。これがAの論文です。例えば、Cheng, L&P. C. Hsiung, 1998 っていうのが注ですね。それから、Aの後ろから3行目、筒井 2006 というのが注なんですけど、これは単にこういう本を書きましたというだけで、注になっている。そのような論文で問われる注の質というのが、色々細かいって事をみていただければと思いました。以上です。

学習支援者 伊藤剛

有難うございます。STAP 細胞の盗用の画像のスライドには、右下にアクセスしている日付まで書かれている。URL を添付するのは、ブログやホームページは変わるからってことですね、印刷物と違って。これは職業ルールの癖と新鮮でした。論文は95%くらいが基本的には引用で、残りが自分の主張であるというような作り方と聞いたことがあります。僕の後輩も、すぐ新しい考え方を発見したと自分で文章をブログにも書くんですけど、まったく論文になっていない。ジャーナリズムとか編集の人間からすると、学者さんがやっている事って、やっぱりまったく民間人では出来ないことだなってつくづく思います。ビジネスじゃないという時間軸の流れの中だからこそ出来ると思っています。我々の仕事もどちらかというと、同じことをやらないことが評価になる、次々新しいものを探していくわけですけど、やっぱり常に同じものを見ながら1mmちがう所を探して、それをなんか世の中に提示する事で、1mm世界が進んだみたいなことをやられているのは、本当に凄いなと思っています。もし引き続き質問があったら、このあと坂口先生に聞いて頂けたらと思います。皆さんがジャーナリストになるわけではないし、皆さんがこれから学者になるわけでもない。そういう方たちに向けて、技術指導をしている方たちが話してくれています。学者になるわけでも、ジャーナリストになるわけでもない人たちが何を構造とか仕組みを知ってことは、僕らが日々情報を見る、ニュースを見るときに、からくりが分かる大事なポイントだと思います。直接的に皆さんが真実を知るというノウハウまではいけないですけど、大きくその分野のからくりを知るという事は、僕の中ではリテラシーととらえます。ネット検索はまさにブラックボックスなわけで次回にお話頂こうと思います。今日は、アカデミックという分野の、本当に一部分ですが、からくりの部分のお話をさせていただきました。それでは、改めて坂口先生有難うございました。